

アートを活用した過疎地活性化に関する研究

「越後妻有アートネックレス整備事業」の文化面からの評価

Research on Revitalizing Depopulated Regions through the Use of Art
Analysis of the Cultural Aspects of "Echigo Tsumari's Art Necklace Construction"

小林 令明

Reimei Kobayashi

ABSTRACT

problem of depopulation. They are beginning to utilize art to counter this problem. In this region, one result of the slow rate of economic development is that farming village scenery and a great deal of nature remains. Enrichment of the region is being attempted through linking these possessions with art. A new project with a strong public emphasis has been begun, involving four foundational tasks: (1) discovering beauty, (2) planting flowers beside roadsides, (3) stage-setting, and (4) holding a nature festival in six villages, towns, and cities in the Tsumari region of Niigata Prefecture struggle with the art festival, as well as five components necessary for accomplishing these tasks: (1) broad-based cooperation, (2) participation of residents, (3) prioritizing people over facilities, (4) utilizing art, and (5) approaching problems from various angles. This work is an attempt to examine the cultural aspects of Echigo Tsumari's "Art Necklace Construction."

Key Words: Use of Art, Revitalizing Depopulated Regions, Cultural Aspects

1. はじめに

本論文で取り上げる「越後妻有アートネックレス整備事業」とは、新潟県の過疎に悩む越後妻有地区6市町村〔注1〕（十日町地域広域市町村圏）の活性化の為にこなされる地域おこしのプロジェクトである。以後「アートネックレス」と言う。この地域おこしにアートが活用されるということがユニークである。「アートネックレス」の公的発行物である『アートネックレス通信1』は、この事業を次のように紹介している。〔新潟県は越後妻有の山中で、全く新しい地域おこしのためのプロジェクトが始まった。越後妻有は十日町市・川西町・津南

町・中里村・松代町・松之山町の6つの市町村からなる広域行政圏を構成している。典型的な日本の中山間地を舞台に（中略）広域6市町村の連携のもとで世界の現代美術家と地域住民とが協働して行う総合的な地域おこし事業であるという点で、国際的にも稀な特色を有している。

プロジェクトの原点は、都市と地方の関係、あるいは社会と自然の関係をもう一度見直そうということにあった。『人間は自然に内包される』。日本の近代化の課程では見過ごされがちであったこの当り前の事実、常に立ちかえりながら、自治体・住民と世界のアーティストや建築家との協働によって美しい里づくりを行って

いく。そこには、(中略)都市が人間の生きる場としての適格性を失いつつあるという現実の中で、豊かな自然のなかで農業をベースにやってきた地域が、新しい世紀のモデルとして登場する時代が到来せねばならないという確信がある。

アートは古来、自然と関わる方法、技術であった。アートが持つ現場性、予見性、協働性という特質は、地域活性化に貢献する大きな可能性を有している。アートを媒介に場所と深く関わり、地域と自然の魅力を再発見することを通して、地域は(中略)新しい生活の場として再生することができるか。]

「アートネックレス」の問題意識は、上記に良く表現されていると思われる。もともとこの地域は、絹織物の地場産業を持っていた。がすでに伝統的な地場産業が立ち行かなくなったところで、上越新幹線が山ひだ1つ向こう側に建設されたことで、発展するきっかけを持ってない状況にある。それ故に農業以外に地元若者を吸引しておく職場が少なく、若手人口の流出にあり過疎地域である。この過疎地域が、取り残された地域であるからこそ、豊かな自然がそのまま残っているということを財産であると認識して、アートと結び付け、アート自身の持つ現場性、予見性、協働性によって、地域の魅力を高め、住民の意識を高め、交流人口を増やし、魅力ある生活の場にしようとしている。これは、過疎対策をアートでこなすという程度を越えて、地域文化の向上にアートが活用され、アートはこれをやり遂げる力を持っていると主張しているのである。

今までの純粋芸術の一般的なあり方は、政治・経済に対して束縛されることなく自由であることが、芸術の自主性の証しであるとの認識があった。それが地域の活性化にアートを用いる。つまり、役に立つアートを全面に出しているプロジェクトである。アートが地域の活性化

に役立つことは、まず地域の文化に直接関与することである。故に、本稿では「アートネックレス」の意義を、文化面での評価をしようというものである。これまでの文化に必ずしも積極的な政策をしてこなかった日本の状況[注2]を考えると、この事業の意義は大きいと推察される。本論文では、この事業を冷静に評価し、意義と問題点を明らかにしていきたい。関係者からの聞き取り調査・現地の見学・住民意識調査・文献資料等によって、この課題に迫るものとする。

2. プロジェクトの経緯

このプロジェクトは平山征夫新潟県知事が就任直後に「ニューにいがた里創(りそう)プラン」[注3]を提唱したことから始まる。里創プランの内容は、新潟県にある14の広域行政圏のそれぞれが広域単位で独自の地域づくりに取り組もうというもので、具体的には、広域市町村が共同で行うソフト事業に県の補助金を付けることに特徴がある。総額100億円のお金を投入する(白いキャンパスに100億円で絵を描こう。)のキャッチフレーズで、全国的にも珍しい地域おこし、町づくりである。

越後妻有では1994年に第1号の里創プラン地域指定を受けて以来、妻有の6市町村と新潟県の担当者によるワーキンググループを構成し、外部のアドバイザーの協力を得ながら、妻有の里創プランの具体化作業が進められた。1997年から北川フラム氏が、総合コーディネーターとして事業に正式に参加した。氏の役割は妻有の6市町村が足並みを揃え、計画段階から実施までの事業全体の企画・調整を行うこと役割を果たすことである。その後4年間の取り組みの成果は「越後妻有アートネックレス整備構想」という形でまとめられた。

3. 越後妻有アートネックレス整備構想

『アートネックレス通信1』に以下のように説明されている。[アートを活用して美しい里づくりを行うことによって、地域を見直し、そこに誇りと愛着を持ち、その再構築された魅力を世界に発信して交流人口を増加させようという目的とともに、プロジェクトの柱となる4つの事業(①ステキ発見・②花の道・③ステージづくり・④大地の芸術祭)の概要が示されることとなった。人間の知性と技術(アート)を自然と関わらせるといった切り口を持った地域活性化事業である越後妻有アートネックレスは4つの事業を有機的に結合し、10年の事業期間と総額約150億円の事業費をかけて進められる。]と説明されている。

3.1 ステキ発見

越後妻有の自然・文化に隠された魅力を再発見するための写真と言葉のコンテストであると説明されている。これによって、この地域に住む人々に、自分達の住む地域にどのような人的、文化的、自然の資産が在るのか再発見してもらい、確認する作業を促している。またこのコンテストには、この地域外の誰にも応募のチャンスがあり、他地域の人々および都会住人から見た越後妻有の魅力を引出し、住民にも再確認してもらう方法が取られている。またこれによって、交流人口が増すことの経済効果も期待できよう。

作品の募集は1998年8月から1999年7月までの1年間となっている。審査員には、阿倍真理子(イラストレーター)、安斉重男(写真家)、伊島薫(写真家)、大岡信(詩人)、北川フラム(アート・プロデューサー)、中塚大輔(クリエイティブ・ディレクター)、真野響子(女優)とアートに関わる人材を投入し、この地域の中だけに通用する評価ではなく、できるだけ広く普遍的な評価になるよう注意がされているように観察される。ただし、審査員が大都会の住民

であることの偏りは指摘できる。越後妻有の自然・文化は固有の個性であり、都会の個性とはきわだって反対である。越後妻有の個性を見るためには、反対の極である都会人の感性判断を選んだといえる。ここに都会と地方とを突き合わせていく姿勢がある。

「ステキ発見」には住民の発意による128点の賞品が提供されている。

賞品例

- No1 民家滞在1週間と越後松代手作りみそ・家族4名様
- No10 清酒「天神囃子」寒仕込み体験と試飲・ビア1組様
- No32 秋山郷源流カンテラ釣りガイドします・3名様
- No75 ブナの森の結婚式フォレストウエディング・5組様
- No117 雪国体験子育て地60坪 10年間無料・1名様

ユニークで越後妻有の優良な地域資源を賞品にしているところが面白い。この賞品に限ってみれば都会生活者を意識していることが分る。都会生活者からみると、どれも身近に得られないものばかりである。地方であるからこそ得られる文化の蓄積や、自然に内包される豊かさ及びスケールの大きさが実感できることが魅力である。

3.2 花の道

地域の沿道に皆で花を植え、広域をつなぐ美しい交流ネットワークを作ろうとする事業である。住民参加による景観形成の1つのモデルを示そうとしている。

日本は昔から美しい景色に恵まれていた。その美しい景色はすべて自然のたまものである山・森・林・川・湖水・海等であった。それらの優良な景色を借景して、家を建て、庭を作ってきたのが日本であった。しかし、自然が豊かなために採ってくるだけで、美観という範疇で

は補充を怠ってきた。その必要性の認識が薄かったといえる。そのため自ら景色をつくる造景意識の弱いのが日本の現状である。いま景色の造景を怠ってきた都会では、景色を造って行く都市造景が再開発を通しておこなわれる時代になった。地方でも風景は良質といえない状況になった中で、人々の意識において、景色の良さを造って行こうとする造景の方向へ啓発する必要はある。『アートネックレス通信1』にも次のように表されている。この事業は、[身近な場所に花を植える作業を通して、住民の景観に関する意識を高め、住民発の「花のマスタープラン」づくりに結実させて今後の国・県による道路インフラ整備に活用しようというのが狙いである。]

3.3 ステージづくり

ステージは地域の展望を拓くための活動を行う場所としている [注3]。地域コミュニティの核となる施設づくりになるが、我が国のこの

10年間で盛んに展開されてきた、ばらまきの公共施設建設での反省を含めて、ハード（施設建設）とソフト（コミュニティ形成）の両面にわたり進めようとしている。

ステージは越後妻有広域6市町村に1つずつ整備されるが、各ステージが連携することによって、価値在る展開にさせたいとしている。さらに6つの（コミュニティ形成）と（施設建設）が連携することにより、良い広域イメージを発信し、人々を集め、地域住民の意識向上と誇りの形成を求めている事業である。いくつかのステージはすでにアーティストが関わり始めているが、主要となる施設の整備は、2000年以降となるとしている。①十日町ステージ（越後妻有の市）・②中里ステージ（信濃川物語）・③津南ステージ（縄文とあそび）・④松之山ステージ（森の学校）・⑤松代ステージ（雪国農耕文化村）・⑥川西ステージ（新田園都市づくり）

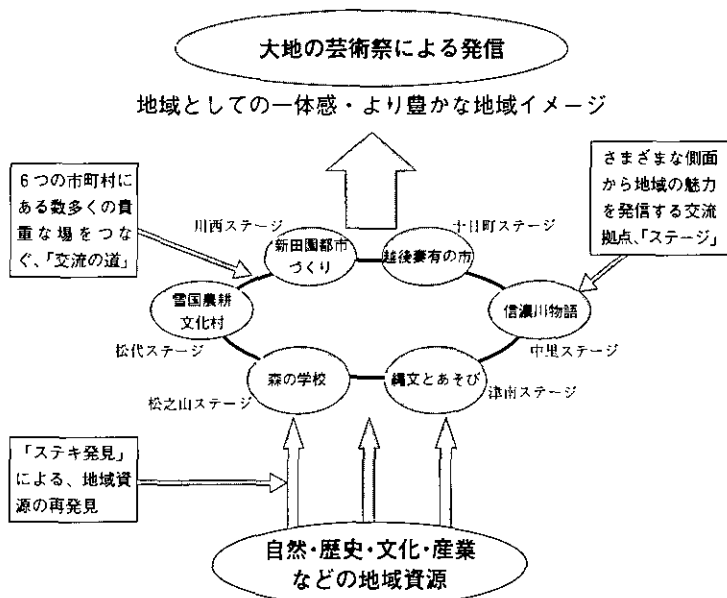


図1 4つの事業

3.4 大地の芸術祭

プロジェクトの成果を発表するためのお祭りとして、3年に1回のトリエンナーレ形式で「大地の芸術祭」を開催するとしている。第1回の「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2000」は、2000年7月20日から9月10日までの53日間、妻有地域全域を会場として行われる。当初、日本を含む世界26カ国から132人参加と公表されていたが〔注3〕、第一回の「大地の芸術祭」が開催されて、実際は世界32カ国から142人参加となっている〔注4〕。

4. 「アートネックレス」を推進する特徴

1 広域連携、2 住民参加、3 ソフト優先、4 アートの活用、5 多様な入射角の5つの特徴をあげている〔注3〕。

4.1 「広域連携」は762kmの広い地域がそっくり過疎であり、過疎地域が連携することで、市、町、村相互の人材、財源、各種施設を効率的に活用、連携、機能分担を進めるとしている。

4.2 「住民参加」は、計画段階から実施、運営まで住民が主体的にプロジェクトに関わる構造をつくらせようとしている。経済的な団体、趣味のグループ、集落等の様々な角度からの参加が期待されている。さらに、情報の公開を徹底し、妻有地域外からの人々に対しても、参加の窓口を大きく開くとしている。

4.3 「ソフト優先」は、従来、美術館等のハコもの建設に偏ってきた公共事業のあり方への反省に立ち、ソフト事業を先行して、参加および連携の契機を高めてから、ハード整備に取りかかる事を基本とする。各「ステージづくり」では、妻有地域外の専門家の参加によって、多様で質の高いソフトプログラムを導入し、地域の展望を拓くための活動が継続性をもって行われるようにするとしている。

4.4 「アートの活用」は人間と自然をつなぎ、場所の発見を促すアートの手法を随所に活用す

ることにより、自然を含む地域資源に対してつねに発見的な構えに立って、そこから学びながらプロジェクトを推進する。さらに、アートの持つ協調性、発信性によってコミュニティの再生を媒介し、地域が世界に対して、大きな開口部を持つことを目指す。

4.5 「多様な入射角」は、この「アートネックレス」が関わっている問題意識は、「アート」「建築」「地域・まちづくり」「自然環境」「農業」「教育」「都市化と過疎」「高齢化」など多様なテーマと問題意識をもつ。そこで問われる問題は、妻有の地域を超えて、我が国、世界において普遍的である。それ故に地域外の様々な分野の人々の参加が可能なのであり、それぞれの分野の第一線で活躍する多くの人たちが、共感し、協力しはじめている。

5. 住民意識調査の目的

以上の事業者側の意向に対して、住民側はどうとらえているのだろうか、「アートネックレス」の認知状況と事業の目的に対する住民意識を調査検討する。

5.1 調査方法

調査対象は妻有6市町村の内、十日町市と中里村を対象とした。本来6市町村全てを調査対象とすれば最良であろうが、一定の傾向を捉えることを目的としたので、越後妻有広域中最大の人口を擁する十日町市と町村の中で中規模の中里村を選んだ。調査対象者は住民基本台帳より任意抽出した。アンケート記入は郵送方式を取り、1999年の10月初旬の調査である。

十日町市100人（男性50人、女性50人）、中里村70人（男性35人、女性35人）として、それぞれ20代、30代、40代、50代、60代の代表として、25才、35才、45才、55才、65才の男性・女性を対象とした。

5.1.1 質問内容

質問1. あなたの年代は、性別は、〔20代、 30

代、40代、50代、60代] [男性、女性]

質問2. アートネックレスを知っていますか。

[①知らなかった、②あまり知らなかった、③まあ知っていた、④良く知っていた]

質問3. アートネックレスは、妻有広域の魅力を再発見し、アート(芸術)によって地域の魅力を高め、住んでいる人々の誇りを高め、外部から入って来る観光客、芸術関係者の交流人口を増やして地域の活性化を目指す事業です。あなたは、アートネックレスが地域の活性化に役立つと思いますか。

[①役立つとは思わない、②あまり思わない、③まあ思う、④良く役立つと思う]

質問4. アート(芸術)によって地域の活性化を図る政策をどう思いますか。

[①良いとは思わない、②あまり良いとは思わない、③まあ良い、④良いと思う]

質問5. 「大地の芸術祭」は今後10年間に100人以上のアーティスト(芸術家)が日本を含む世界中から妻有にやって来て、作品を作り、この地に設置をしていく予定です。芸術作品と共に、公共整備も行われる事もあります。これによって皆さんの住んでる地域が、良い里づくりをすること出来ると思いますか。

[①出来るとは思わない、②あまり思わない、③まあ思う、④良く出来ると思う]

質問6. 外部から芸術家が来て妻有の地で活動する事をどう思いますか。

[①良いとは思わない、②あまり良いとは思わない、③まあ良い、④良いと思う]

質問7. 「芸術」が、地域を良い方向に変えて行くというこの事業4つのプロジェクトに、県や妻有広域6市・町・村はお金を投入しています。(今後10年間に約150億円の予定です。補助金で約2/3がまかなわれ、妻有広域負担は、約1/3です。)この負担金額の価値は

あると思いますか。

[①価値はない、②あまり価値はない、③まあ価値はある、④充分価値はある]

質問8. 「大地の芸術祭」は、妻有の為に選ばれたアーティスト(芸術家)が作品を造りにやって来ますが、住んでいる皆さんの協働参加が期待されています。つまり、一緒に造るということです。これにできる範囲ですが、あなたは、「知恵、労力、機材、技術、材料、親切」等のボランティア協力(好意なので無報酬)したいと思いますか。

[①協力したくない、②あまり協力したくない、③まあ協力したい、④協力したい]

6. 調査結果

表1 住民意識調査人数と回答数(1999年)

	十日町市				中里村			
	男性		女性		男性		女性	
人口	44000人				6600人			
歳	回答数	配付数	回答数	配付数	回答数	配付数	回答数	配付数
25	2	10	2	10	1	7	3	7
35	5	10	4	10	1	7	3	7
45	3	10	3	10	2	7	2	7
55	2	10	5	10	4	7	6	7
65	4	10	4	10	0	7	0	7
小計	16人	50人	18人	50人	8人	35人	14人	35人
回答率	34人/100人 (34%)				22人/70人 (31.4%)			

全170人中59人の回答があり、回収率は34.7%であった。この内無効回答は十日町市3票、中里村1票であり、有効回答率は十日町市34%、中里村31.4%であり、全体有効回収率は32.7%であった。

回答数は少ないが、各市村の性別平均及び項目別全平均の数値には、一定の傾向を計る上で有効性があると判断した。

表2 住民意識調査 性別・年齢別(1999年)

[1(悪)～4(良)]

十日町市 男性

	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8
男性25歳(2人)平均	2	2.5	3	2.5	4	2	2
男性35歳(5人)平均	2.4	2.8	3	2.8	3.8	2.6	3.2
男性45歳(3人)平均	1.3	2.7	3	3	3.7	2.7	2.7
男性55歳(2人)平均	2	3.5	4	4	4	3.5	3.5
男性65歳(4人)平均	1.8	2.5	3	2.8	3.8	3	3.5
十日町男性平均	1.9	2.8	3.2	3.0	3.9	2.8	2.4
質問項目別全平均	2	2.5	2.8	2.7	3.5	2.4	2.7

十日町市 女性

	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8
女性25歳(2人)平均	1	2.5	3	2.5	3.5	2	1.5
女性35歳(4人)平均	1.5	1.8	2	1.7	2.3	1.3	1.7
女性45歳(3人)平均	2	2.3	3	2.7	3	2.7	3.7
女性55歳(5人)平均	2.4	2.8	3	3	3.3	2.3	3
女性65歳(4人)平均	3.5	2	2.5	2	3	2	2.5
十日町女性平均	1.7	2.3	2.7	2.4	3	2.1	2.5
質問項目別全平均	2	2.5	2.8	2.7	3.5	2.4	2.7

中里村 男性

	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8
男性25歳(1人)平均	1	3	3	3	3	3	2
男性35歳(1人)平均	2	1	1	2	4	2	2
男性45歳(1人)平均	1.5	3	3	3	3	2.5	3
男性55歳(4人)平均	2.5	3.5	3.5	3.3	3.8	3	3.3
男性65歳なし							
中里村男性平均	1.8	2.6	2.6	2.8	3.5	2.6	2.6
質問項目別全平均	2	2.5	2.8	2.7	3.5	2.4	2.7

中里村 女性

	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8
女性25歳(3人)平均	1.3	2.7	3.3	2.7	3.7	2	2
女性35歳(3人)平均	2.3	2.3	2.7	2.7	3.7	2.3	3
女性45歳(2人)平均	2.5	2.5	3	2.5	3.5	2	3
女性55歳(6人)平均	3	2.5	2.7	2.3	3	2.5	3
女性65歳なし							
中里村女性平均	2.3	2.5	2.9	2.6	3.5	2.2	2.8
質問項目別全平均	2	2.5	2.8	2.7	3.5	2.4	2.7

質問2の「アートネックレス」を知っていたかの質問では、質問項目別平均値が2であり、あまり知らなかった状況である。アンケート調査を実施した1999年10月時点は、住民への広報活動がうまく機能してない時期と思われる。

質問3の「アートネックレス」は地域の活性化に役立つと思うかの質問では、質問項目別平均値が2.5であり、「まあ役立つと思う」に傾いた意識になっている。

質問4の「アートによって地域の活性化を図る政策」については、質問項目別平均値2.8であり、「まあ良い」という答えである。

質問5の「大地の芸術祭」で今後100人以上のアーティストが来て制作をしたり、公共施設を造る事でよい里造りができると思うかの質問では、質問項目別平均値2.7であった。「まあ思う」に傾いた答えであった。

質問6の「外部から芸術家が来て妻有の地で活動する事をどう思うか」の質問では、質問項目別平均値が3.5で、「良いと思う」意識が強く出ている。この地は外部から来る人を拒まない、受け入れる素地を強くもっていると言える。

質問7の「このプロジェクトは地域負担金額の価値を持っていると思うか」の質問では、質問項目別平均値は2.4であり、消極的な気持ちが出ている。

質問8の「作品造り等のボランティア協力をしたいと思うか」の質問では、質問項目別平均値2.7であり「まあ協力したい」気持ちであった。

7. 住民意識調査の分析

住民意識調査の回答率が約1/3であることは、住民の「アートネックレス」への関心が低いことを表していると言える。質問2の広報活動がうまく機能していなかった事とも連動している結果である。しかし、調査が郵送方式であることや、調査時期が農繁期の10月初旬であった影響は考えられる。

平均点の最も高いのは、質問6の外部から芸術家が妻有に来て活動する事を良いとしていることである。外部の人を受け入れる意識は、この地に豊かにあるといえる。他人にやさしい人々は、今後の人との交流に大なる作用を成すことが推察される。これは交流人口の増大を支える重要な特質である。

質問4のアート（芸術）によって地域の活性化を図る政策を、まあ良いと思い、質問5のアーティスト（芸術家）が作品を設置し、公共整備も行われることも伴って、良い里づくりはまあ出来ると思っている結果であり肯定的であるが、これに市村が資金を投入する事に至ると、良いと思わない心情が見えてくる。

7.1 反対意見

自由記述から分析をしてみよう。

自由記述1.「突然、芸術だ、整備事業として計画されている、とかいわれても、全市民にはまだほとんど理解されていないのではないのでしょうか。今、失業者が多いのです。職を求めている人があふれているのです。生活を維持していくことに精一杯な人達が、どうして芸術に賛同できますか。地域の活性化には、もう少し他にやるべきことがあるはずだと思います。」ここには①住民への広報活動が不十分、②生活に困っている、③他の地域活性化案があるはずだ、④アートどころではない、が指摘できる。

自由記述2.「これだけのお金をかけて、本当に地域生活にどんな役割をはたすのか疑問です。私はこのような芸術作品を一度は見に行っても、二度目も行きたいとは思いません。子供の公園の整備もできない、学校の修繕もしてもらえないというのに、そんなお金、誰が出すものかと思っている子供の親達もいると思います。この事業には反対です。」ここでは、⑤事業に大金を使っても効果に疑問、⑥他の施設整備に投資しろ、⑦芸術を二度目は見に行かない、⑧事業には反対、が指摘できる。

上記2例の意見の言いたいところを抽出してみると、1) 生活に困っていると、アートどころではない、もっと他の地域活性化案があるはずだ、事業には反対。2) 事業に大金を使っても効果に疑問、他の施設整備に投資しろ、芸術を二度目は見に行かないものに大金を入れ込む事業には反対。とまとめることが出来る。共に「アートネックレス」に投入される金額の多さに反対している意見である。また、アートに関心の薄い層の意見である。

7.2 作品設置の反対意見

自由記述3.「ただオブジェがある程度では、住みづらいまちです。」

自由記述4.「都会並みにあちらこちらと並べても、田舎の風景には合わない様な気がする。」

上記2例は、まだ実態を見ない「大地の芸術祭」に不安を抱いている意見である。すでに十日町市の道路沿いに設置されている別の企画である「十日町石彫シンポジウム」により制作された石彫作品をみての意見と思われる。アートにはある程度関心を持っている層の意見である。

7.3 賛成意見

自由記述5.「今回作品を制作された方に大変感謝している。不登校の息子に声をかけて下さり、犬をほめてくださったとのこと、大変喜んでおりました。私もその方と挨拶をする事ができて、良かったと思っています。」

アーティストとの接触で良い人間性に触れ、好感を得ている例である。さらに要望が書き添えられて「芸術家がアトリエを作り、子供達に色々教えていただきたい。私の息子（14才）に芸術を通して心の病気を直してもらいたい。そんな活動はないだろうか。」

アーティストとアートが秘める可能性に関心をしめし、期待をしている層の意見である。

7.4 政策の運営方法に関する意見

自由記述6.「住民に対して、芸術とはなにかを理解してもらうことが先決です。早急に事

業を押し進めるのではなく、時間をかけて、理解していただいた上で、行なわなければ良い方向へは進まないと思う。若い層にこの事業を理解し賛同してもらい、協力できる体制作りが必要と思う。」

正論と思われるが、事は過疎対策であり、長い時間をかけてはられないのが実情であると思われる。「芸術とは何か」の理解においても十分な時間をかけた話し合いをして、はたして住民の賛同が得られるだろうか、今までの芸術を扱う日本の教育現状〔注5〕を考えると今は疑問である。まず「大地の芸術祭」において出現した作品を見ることによって、理解が進むということも考えられる。

8. 考察

住民は突然に前例のない方法で「アートによって過疎対策をする」と言われて、戸惑っている状況が見えてくる。前例がなければ賭けの政策であり、反対でもしたくなる気持ちは理解できる。

もう一度このプロジェクトが生まれた経緯を点検してみよう。もともと新潟県知事による「ニューにいがた里創(りそう)プラン」によって各広域単位で地域活性化のソフト造りに励めという、行政命令から事が発している点が特徴である。求められているのは、「里創りの理想プラン」である。ここからは、前例のあるプロジェクトの後追いではなく、理想のプランを作れとの気概が伝わってくる。前例のある地域振興政策で記憶にしっかりあるのは、リゾート地開発によるゴルフ場問題であり、リゾートホテルであり、テーマパーク作りである。これらが問題を残して閉鎖が相続していることは、前例のあるソフトがいかに欠陥をかこっているかが分かってくる。

ここで意義と問題点を明らかにしていこう。

8.1 意義

- ①「里創りの理想プラン」を作れとの独創的な精神がある。
- ②「農耕地の自然の美しさを財産と認識」し、既に在るものの価値を最大限に認めようとしている。
- ③「自然破壊に直結する開発行為をしない」自然共生の道を探っている。
- ④「外部資本に頼らない」方法で地域を活かす戦略を取っている。
- ⑤「ソフト優先」の考えを先行し、今までの施設建設優先の公共事業のあり方から脱却をした、ステージづくりにしようとしている。
- ⑥「公開重視」でプロジェクトの内容、説明、参加において地域以外の日本や世界に呼び掛けている。
- ⑦「世界共通のテーマ」である過疎、地域、伝統、農業、高齢化、自然、都市のいきづまり、の問題を持ち、芸術との関わりを問うている。
- ⑧「協働の精神」でプロジェクトの推進を図ろうとし、地元の人々と芸術家との協働による作品づくりを考えている。
- ⑨「何人かのアーティストは長期に滞在し」地元の人々とのものづくり等の交流を重ねている。
- ⑩「特に子供たちの今後に多大な文化的影響」が期待できる。

8.2 問題点

- ①「地元の人々の理解」をまだ十分に受けていない。
- ②「アートによる過疎対策」は、3年毎に開催される大地の芸術祭の一時的な交流人口増大に頼っている〔注6〕。
- ③「交流人口による集客がどのように人口増をもたらすか」は不明である。
- ④「交流人口によって落ちる金」で、地域は

立ち直れるか。

8.3 交流人口の増大

集客で求められることは、①特色がはっきり分かるテーマを持っていること、②他に同じようなものがないユニークさ、③何回も再訪したくなる内容を持っていることである。

「アートによる過疎対策」は一見変な感じはするが、過疎ゆえに地元に残っている農耕地〔注7〕は、「人の手によってつくられた自然」であり、植林された山と棚田を含む田圃は永々と地元の人々が農民として築いてきた美しい風景である。豊富にあるこれ等を財産としてあつかい、注目される事は、地元の人々の誇りの気持ちへと変化する可能性がある。広範囲の林や川と田畑のそこそこの拠点に142人のアーティストによって作品が置かれる予定なので、移動する時、その景色を見ることになる。交流人口である都会人はこれをどう評価してくれるか。またこの地に点在している温泉宿とうまく相互作用すると効果的である。今後10年の間に3年毎に開催される「大地の芸術祭」は広域762kmに点在する約200の集落に作品を展示する予定なので〔注8〕、実現されれば広大なテーマパークが出現することになる。そうすると、春から秋までの集客が新たに出現することになる。

8.4 二つの実行委員会事務所の存在

地方自治体主導のプロジェクトにおいて、実際の指導的役割をしているのは、都会のシンクタンクである場合が多い。「アートネックレス」も1997年から正式に総合コーディネーターとして参加している北川フラム氏は、東京にある㈱アートフロントギャラリーの代表である。北川フラム氏は、1994年完成の立川市の「ファーレ立川」〔注9〕において、大規模な都市型パブリックアートを主導したアートプランナーである。実績のある実力者であるが、代表を務めているアートフロントギャラリーが、「アートネック

レス」の1つの事業である「越後妻有大地の芸術祭実行委員会」の東京事務局〔注10〕になっている。現地事務局は十日町市にあり、十日町地域広域事務組合事務局企画振興課内に「越後妻有大地の芸術祭実行委員会事務局」〔注11〕を開いている。東京事務局では、報道関係者への説明会、シンポジウム、アートアドバイザー会議、公募公開審査会、アーティストへのコンタクト、ボランティア募集・説明会・交流会、アートネックレス通信編集等盛んな活動をしている。特に情報公開に関して多大な成果を上げていることは評価できる。新潟県の一地域の出来事ではなく、日本中へ、又世界に発信している功績は大きい。

しかし、事務局の存在が「アートネックレス実行委員会事務局」ではなく、「大地の芸術祭実行委員会事務局」であることである。北川フラム氏は、3年に1回開かれる「大地の芸術祭アートトリエンナーレ2000」の総合ディレクターになっている。氏の業績である「ファーレ立川」の都会版に対して、農村版アート展開としてこのプロジェクトがあるのなら、芸術作品や「ステージづくり」が、多彩で能力の高い建築家やアーティストによって、現地で触発された優良な作品が提供される期待はあっても、「アートネックレス」の大きな目的は過疎対策であったはずである。現地の声にたえず対応を余儀なくされている現地事務局との、価値の置きどころに相違が生じはしないかとの懸念がある。

9. おわりに

しかし事業者側は4年の歳月をプランに費やし、事業の骨格はユニークな過疎活性化事業であると言える。地域の特性を財産として引き出し、住民自身の手で、またアーティストにより分かりやすい形に取り出すこと（造形行為）によって、地域の魅力の再確認と地域文化の創造を秘めている事業である。又、「大地の芸術祭」の

アートを活用した過疎地活性化に関する研究

お祭りにより、地域外から訪れる観光客による交流人口増の経済効果を期待している〔注6〕。地域の担い手である住民は、事業者側の熱いまなざしに対して、理解を示している段階とは言えない。しかし「アートネックレス」は10年計画の2年目であり、始まったばかりである。「大地の芸術祭」で実際に出現した作品を見ることで、又、アーティストとのボランティア活動に協働参加する事で、実際にアートの当事者にな

ることによって、住民自身がアートは実生活の中にあるもの、生活の中から生まれるものと、徐々に理解されてくる可能性はある。住民意識に変化がおこれば、アートは文化を造ったことになる。今後10年の歳月をへて、地域にいかになんたな文化が展開を示すのか観察して行きたい。又、「アートネックレス」の大きな目的は過疎対策であるので、アートがどのような役割を演じるか観察して行きたい。

表3 人口の推移

単位 人

	昭和30年	昭和40年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	H7/S30
新潟県	2,473,492		2,391,938		2,478,470		2,488,364	1.01
十日町広域圏	122,761	108,359	96,074	92,632	88,084	83,893	80,827	0.62
十日町市	50,008	49,576	50,211	49,555	48,005	46,278	44,728	0.88
川西町	14,804	12,197	10,205	9,883	9,423	8,912	8,524	0.58
津南町	21,909	17,804	14,328	13,841	13,464	12,955	12,865	0.59
中里村	10,613	8,341	7,127	7,057	6,821	6,765	6,602	0.67
松代町	14,023	11,332	8,273	7,114	6,026	5,207	4,690	0.33
松之山町	11,404	9,109	5,930	5,182	4,345	3,776	3,418	0.30
岩船圏	107,137		90,062		88,319		83,846	0.78
新発田圏	156,386		147,963		151,401		154,233	0.99
新潟圏	603,752		718,686		797,878		835,144	1.38
五泉圏	99,803		84,087		81,307		77,140	0.77
三条・燕圏	245,422		264,175		274,372		272,342	1.11
長岡圏	380,805		355,109		364,912		372,956	0.98
柏崎圏	123,682		98,825		103,140		107,129	0.87
小出圏	61,219		55,301		54,491		46,490	0.76
六日町圏	81,306		74,223		73,963		75,724	0.93
上越圏	219,911		198,773		201,733		198,645	0.90
新井頸南圏	72,677		58,256		56,319		54,159	0.75
糸魚川圏	77,878		62,900		60,612		54,780	0.70
佐渡圏	120,753		87,504		81,939		74,949	0.62

資料：総務庁統計局「国勢調査報告」、各市町村要覧、各市町村史〔注12〕

調査時点：昭和30年～平成7年

表4 世帯数の推移

単位 世帯

	昭和30年	昭和40年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	H7/S30
十日町広域圏	20,330	20,781	23,664	23,684	23,155	22,797	22,924	1.13
十日町市	7,473	10,399	12,314	12,516	12,482	12,506	12,794	1.71
川西町	2,786	2,599	2,343	2,358	2,315	2,246	2,213	0.79
津南町	3,973	3,892	3,685	3,706	3,661	3,589	3,663	0.92
中里村	1,672	1,705	1,679	1,683	1,646	1,698	1,649	0.99
松代町	2,402	2,355	2,072	1,969	1,753	1,576	1,501	0.62
松之山町	2,024	1,831	1,571	1,452	1,298	1,182	1,104	0.55

資料：総務庁統計局「国勢調査報告」、各市町村要覧、各市町村史〔注12〕

調査時点：昭和30年～平成7年

注

- 1) 表3人口の推移、表4世帯数の推移を参照。
資料編1, 越後妻有圏域の諸データ, 越後妻有大地の芸術祭実行委員会, 1999 平成7年度の国勢調査に基づく十日町地域広域市町村圏の人口は80827人であり、前回平成2年度国勢調査時の83893人から3000人強減少している。減少率は、-3.7%であり、県内では、-4.0%の佐渡に次ぐ高率となっている。30年間の推移でも、減少率は -38%と大きい。40年間の人口と世帯数を比較すると、十日町市、津南町、中里村では、人口は減少しているものの、世帯数は現状維持か増加しており、世帯分離や核家族化の影響が反映されている。人口減少は松代町 (0.33)、松之山町 (0.30) と高く、世帯単位で転出が行われ、それを埋め合わせる転入も少ない。
- 2) あすを読む, NHK TV, 1996 芸術・文化関係予算 (1995年) 額で日本は750億円、フランスは2965億円であり、日本はフランスの約1/4の予算規模である。一般会計費に占める割合では、日本はフランスの約1/10である。
- 3) 越後妻有アートネックレス通信1, 越後妻有大地の芸術祭実行委員会事務局, 1-13, 1999
- 4) 越後妻有アートネックレス通信2, 越後妻有大地の芸術祭実行委員会事務局, 20-21, 1999
- 5) 梅原猛: 芸術教育の意味, 平成9年私立短期大学美術・デザイン教育担当教職員研修会報告書, 8-16, 1997
- 6) 大地の芸術祭・「越後妻有アートのトリエンナーレ2000」公式ホームページ, 2000
<http://www.artfront.co.jp/art=necklace/top.htm>, 集客予想として20万人を期待している。
- 7) 人口減少地でありながら、筆者の「大地の芸術祭」全地域の現地調査では、耕作放棄地は一見したところ目立たず、丁寧に耕作された優良な農耕地風景が広がっていた。
- 8) 里山礼讃-「大地の芸術祭」, 造景, 30号, 建築資料研究社, 11-26, 2000
- 9) 事業名: 立川基地跡地関連地区第一種市街地再開発事業, 所在地: 東京都立川市曙町2丁目8及び35~41番, 施工地区面積59151.19平方メートル, 施工者: 住宅都市整備公団東京支社, アートプランナー: 北川フラム/アートフロントギャラリー, 参加アーティスト: 36カ国92人, オープン: 1994年10月13日
- 10) 「越後妻有大地の芸術祭実行委員会東京事務局」150-0033東京都渋谷区猿楽町29-18-A 208 tel: 03-3476-4360
- 11) 「越後妻有大地の芸術祭実行委員会事務局 (十日町地域広域事務組合事務局企画振興課内)」948-0036新潟県十日町市大字北新田1-10 tel: 0257-57-2285
- 12) 資料編1, 越後妻有アートのトリエンナーレ2000, 作品公募プラン応募要項, 越後妻有大地の芸術祭実行委員会, 17-22, 1999